

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail:comm.tko@nsk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office



第41号

(通巻1276号)

2017年12月24日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18



↑ 11/25 葛飾学園100周年記念式典
葛飾学園新園舎 →

← 10/8～9 ふれあいキャンプ



↑ 11/4 アコライト研修会 三光教会

← 11/2 教区墓地礼拝 (小平霊園)

12/2 みんなで作るクリスマスパーティー 目白聖公会



↑ 11/26 光の礼拝 主教座聖堂 →



11/30 東北教区主教按手式 吉田雅人師父 仙台基督教会

キリストによる命の回復

(マタイによる福音書25章31節～46節)



司祭 高橋 宏幸
(香蘭女学校チャプレン)

わざわざ申し上げることもないのですが、新約聖書の中にイエスさまの出生届けはありません。死亡届の記録もございません。長いキリスト教の歴史の中でも、イエスさまは30数歳のご生涯を送られたとされています。

統計によると昨年度の日本人男性の平均寿命は約81歳とされています。



もちろんイエスさまの30数年のご生涯は、十字架の上で終わったわけではありません。一つの大きな区切りを大きな神さまの命の中でつけられたのが、30

数年だったと言えますでしょう。

そう考えますと現在の日本人の平均寿命がその2、3倍伸びているというのは、本当に嬉しいこと、感謝すべきことです。さらに



かどうか、簡単には肯定できない気がします。

そのようなことを思いながら、私はふと名匠黒澤明監督の「生きる」という映画を思い出します。映画で使われた歌詞の一部にこうあります。「明日の月日はないものを」、「今日日はふたたび来ぬものを」、「そして今日日そのような思いは軽しめられて



ているように、うで残念な思いです。あるいは室町時代に発達し、千利休によっ

て改革された「侘び茶」、これには「一期一会」という、多くの人に知られている言葉があります。一期一会の精神、それは、いつ戦場の露となるかも



楽だとかお金持ちの趣味だとか言われま

らない時に心を込めて過ごすということではないでしょうか。21世紀も17年が過ぎようとしています。発展を遂げ続けていく一方で、さまざまな事件に接して



付けられます。あるいは、世間ではキリスト教の十八番（おはこ）と言われております「愛」という言葉も全く違った意味あいで芸能番組、週刊誌あるいはつり広告から目に飛び込んでまいります。そこには500年ほど前、イエスさまの福音の心を携え日本の地を踏んだ宣教師たちが命がけで伝え

に託されていると受け止めたいと思います。

大変有り難いことに、医学をはじめいろいろな分野での進歩発展はめざましいものがございます。そしてそのような発展それ自体は喜ばしいく、恩恵を私たちも被っており、感謝すべきことです。けれども、それが誤った方向にズレ始めた時、エスカレーターし始めた時、そして、人間の分際をわきまえず、ある意味聖書がもつとも恐れている神さまの領域まで人間が手を染め始めた時、バベルの塔の物語が教えているように、謙虚さ、神さまからの賜物である命への畏怖の念、畏敬の念、イエスさまに見られる神さまへの従順と感謝といったものにあらためて思いを馳

せますとき、私にはイエスさまのこの言葉が浮かんでまいります。「一日の苦労は一日で足りる。明日のことは思いわずらうな、明日は明日自らが思いわずらうであろう。」いろいろな解釈があるだろうと思いますが、私も年齢と共にこの言葉から感じる意味合いが変わってま

いました。しかし一つ申し上げたいのは「今」に心を込めて生きる、そのことを一つ一つ大事にしてきたのではないか。「今」という字に心を付けると「念」という字になります。「念じる」ことすなわち、祈って生きる、祈りを生



に扱われる事件、枚挙にいとまがないと言ってもいいかもしれません。

かつて「人の命は地球より重い」といわれました。今やその言葉だけが一人歩きをしているような事件が後を絶たない、胸を締め

恐ろしいほどに、あるいは愚かなほどに神からの授かり物ものである命が軽くみられ扱われる、そんな風潮が強まれば強まるほどに、むしろかつてご大切な心である神さまの愛、神さまからの命、ご大切な命、それにおける私たちの心を、祈りを、働きを取り戻すべく努力の時間が今再び舞い戻ってきたと、私たち



せることが求められてくるはずで
す。

現代の深刻な状況、とりわけ命
に関わる悲惨な状況の原因は評論
家でなくともいくらでも言えます。

私も言えます。専門性はありませ
んけれども俗悪なテレビ番組の、
あるいは雑誌の氾濫、ゆがんだ競
争社会原理が引き起こしている歪
み、異常なまでの物質主義、拝金
主義、いくらでも出てくるような
気がいたします。けれども、その
おそらく最も根底に横たわってい
るであろうと思われることは命
という一人一回限り、一つ限り、
そしてその人生に授かったものを
神さまからの尊い賜物としていた



だく、しかも有り難くいただく心
の欠如がすべてではなからうかと
反省させられることも度々ござい
ます。

そういう中で聖書が一貫して主
張し続けているのは、命の肯定で
あります。誰一人自らの力で命を
手に入れた者はおられません。自ら
の力でこの世に降り立った者もお
りません。そうではなしに命とは
尊い授かりものであるからこそ教
会は声を大にして言い続けてきた
のです。私たちに授けられた命は
神さまにとっても大切な命なのだ
と。しかもその命は条件付きで愛
されたり愛されなかったり、大事
にされたりされなかったりという
ことがあつては絶対ならないもの
なのです。加えまして、私たちは
日々時間に追われています。時間
に縛られ振り回されて
おります。まさに数字
の流れに、数字の中に
生きている。しかし世
の中には数字で計るこ
とのできない、いや絶
対に数字で計ってはな
らない命の時間、神さ
まの時間、神さまの命
に生かされている時間



というも
のがある
のだと思
います。

そのこと
をイエス
さまか
らのメッ
セージと
して聞き
取り、伝
え自らの中で軸にしていふことを
聖書は限りなく大事にしていまし
たし、私たちに言い続けているは
ずです。

そのメッセージを、私すなわち
神である私、イエスである私に
とつて、あなたがたは掛け替えの
ないご大切なのだと、そして私は
あなたがたに決して数字で計って
はならない神の命
の時間を授けてい
るのだと、その神
さまの御心への感
謝と謙虚な心を携
えながら、ご降誕
へ向けて一歩一歩
整えていきたいと
思います。
今日は「キリス



トによる回復」という教会暦の
最後の日です。神さまからの命、
命の原点への立ち帰り、本来の
命のあり方を回復する、取り戻
すこと、そのことをテーマにし
なければ成り立ち得ない主日の
はずです。と同時にご降誕への
スタートでもあります。間もな
く神さまの命、命そのものの誕
生に向けての備えの時が始まり
ます。命という神さまからの賜
物、決して数字では計ってはなら
ない尊い贈り物、そのお誕生とそ
れを受け入れる私たちの心備えを
黙想の糧としながら、ご降誕の時
への備えをご一緒に整えていき
たいと思います。



聖地旅行から見える

パレスチナ

正義と平和協議会など3委
員会と共催で8月に実施した
サラーム・パレスチナの「
2017新しい聖地旅行」の
参加は、私にとって11回目の
聖地旅行で、スタッフとして
は6回目になります。

始めの2回は伝統的な聖地
旅行でしたが、2004年に
は植田仁太郎主教の旅の随
行者として初めてパレスチナ側
から聖地を見ることになりま
した。視点が変わると見えて
くるものも変わります。以前
はあそこにイスラエルとい
う国ができたのは聖書の約
束の成就だと思っていました
が、イエスの弟子の末裔が
2000年の間住んでいたパ
レスチナは、イスラエルの建
国後70年間、さらに厳しい時
を生きていたのです。

第2次インティファダ後
の2004年以来、何度も聖
地に行くようになると色々な
変化に気付きます。旅行者も
検問所を歩いて通らなければ
ならなかった数年間のあと、
バスに乗ったままでよくな

り、今ではほとんどフリーパ
ス状態。でもパレスチナの人
たちは相変わらず検問所の長
い通路を歩いて抜けなければ
通ることができません。

東エルサレムは占領地なの
に、イスラエルはエルサレム
全部がイスラエルの領土だ
として、東
エルサレム
にある家を
色々な理由
をつけて接
収し、イス
ラエル国旗
をこれ見よ
がしに掲げ
ます。その
数は行くと
びに増えて
いきます。

ヨルダン



川西岸地区
のイスラエル入植地は、最初
の頃は丘の上だけだったのに
毎回行くたびにどんどん下に
拡がって、今では谷にあるパ
レスチナ人村との境界も見分
けられないくらい近くまで拡
がっています。
パレスチナ系住民の多いイ

スラエル領内のナザレでもパ
レスチナ人が経済活動をしに
くい環境を作り、街から引つ
越せざるを得ない状況が作
り出されつつありました。

建国時のような大量虐殺こ
そありませんが、陰湿なパレ
スチナ人追い出し政策をそこ
こで目にするこ
とになりました。

ダワーニ主教夫
妻に招かれた夕食
会で再会できた聖
ジョージ大聖堂の
信徒で友人のハナ・
キレーさんは、ど
んなに厳しい状況
でもこの地を離れ
るつもりはありま
せん。私たちの国
なのですからと話
してくれましたが、
いつの日か必ず正

義がなされる日が来ると信じ
て希望を持ち続けるその強さ
に、私もその日まで、たとえ
小さな力であっても、共に祈
り、歩み続けていきたいと思
います。

聖マーガレット教会信徒

梶山 順子

シリーズ 2022の人⑤

ドリーン・シモンズ

聖オルバン教会信徒のド
リーン・シモンズさんが、秋
の褒章で旭日双光章を受賞し
ました。長年にわたりNHK
のBSテレビや海外向け放送
の相撲解説を担当、相撲の普
及と相撲文化の紹介に貢献し
たことが認められたのです。

イギリス生まれの85歳。ケ
ンブリッジ大学
で哲学を修め、
1973年に来
日、その時テレ
ビで見た相撲に
興味を持ったと
いいます。以来
ずっと東京に住み、聖オルバ
ン教会の最も古い信徒の一人
です。周囲からは「生き字引」
として頼りにされています。

1974年のある日、ド
リーンさんから「相撲の朝
稽古を見たい」という相談
を受けました。そこで私が
同僚記者の紹介を受けて、
大鵬部屋へ案内、朝稽古を
見学しました。

それからほどなくして自分



で相撲部屋に入りするよう
になりました。中でも出羽海
部屋が好きだったようです。
福の花関をひいきにしていま
した。「有名ではなかったこ
とと、地味ながら日本人らし
いところが気に入りました」
ということでした。このあたり
にドリーンさんの日本人観が
出ています。

茶道や太鼓にも関心を持
ち、自ら太鼓を
打ちます。また、
ある時は白装束
で滝に打たれ、
禊を経験したこ
ともあります。

外務省の研修

所で英語を教えながら、国技
館通いを続けるうちにその存
在が知られ、NHKのBSや
海外向けの英語放送で解説者
を務めるようになりました。

現在は相撲部屋の多く集
まる墨田区両国に住んでい
ます。

礼拝では聖書朗読、代禱を
担当するほか、聖歌隊の一員
として活躍しています。

(文・吉松英美)

ようこそ聖オルバン教会へ



今年8月に着任したアメリカのウイリアム・ハガティ駐日大使が夫人や子どもと一緒に聖オルバン教会の礼拝に出席している。陪餐を受け、礼拝が終わると迎えの車で帰る。そのため、信徒たちと親しく接する機会はないが、「平和の挨拶」では周りの人たちとにこやかに握手をしている。アメリカ大使が聖オルバン教会の礼拝に出席するのは、ハガティ氏がおそらく初めてと思われる。(写真左)

主日礼拝には、かつてこの教会にいた人たちも含め、出張や旅行で来日した人たちがやってくる。世界に開かれた教会である。国別ではアメリカが多く、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドと続く。最近はいンドやガーナなどアジア・アフリカ諸国からも増えている。

この教会に来る人がすべて聖公会というわけではない。カトリックの人もしれば、ルーテル教会の人

もいる。

リーマン・ショックを境に企業の幹部クラスが本国へ帰り、若い人たちに代わった。人事異動のせいか、人の入れ替わりが激しい。それでも教会が回っているのは、日本人も含めて教会を守って来た「核」となる人たちがいるからである。一方でこの教会に来て間もない人たちの中にも、教会委員やサバーバーを志望する人たちがいる。大事なことは奉仕する気持ちである。それは日曜学校の教師たちの献身的な姿を見ればすぐわかる。

姉妹教会の聖アンデレ教会とは、数年前から連携を密にしており、年2回の合同礼拝はスムーズに行われるようになった。同教会の秋のバザーでは、10人以上が売り子として参加、大変喜ばれた。ホット・ドッグのブースも出し、日曜学校もキッズ・コーナーに協力するなど全体で盛り上

げた。

来日5年、ブルソン司祭の説教にも磨きがかかってきた。アメリカ・ジェイケル社のパイプオルガンの美しい音色が人々の気持ちを高める。

聖オルバン教会の礼拝は、この地での1879(明治12)年にまでさかのぼる。現在の聖堂は1956(昭和31)年3月、当時の蒔田 誠主教によって聖別された。

設計はチェコ系のアメリカ人アントニン・レイモンド。彼は帝国ホテルの設計者フランク・ロイド・ライトの弟子として来日、多くの教会の設計に関わった。装飾を省き、素材の良さを活かした質素な感じが良い。建築専攻の学生が見学に来る。結婚式などで訪れる人が「教会らしい教会だ」という。

教会の表は、東京タワーを撮る絶好のスポットでもある。

(信徒 吉松英美)

《信徒リレーエッセイ》

市民と介護を考えるカフェ

「オリーブの木」

聖マルコ教会 協賛 由佳

聖マルコ教会のバリッシュホールにて、第3日曜午後2時〜4時に開催している。

2015年3月より開始してから2年経つ。市民向けに医療、介護をテーマに多くの内容で開催してきた。第23回では、子供をテーマに「アートから読み解く児童心理」を開催。

医療、介護の問題は、子供も含めて多世代で考える問題だと思っている。児童心理の背景には家庭環境が影響している。孤独や寂しさは世代が協力して解決する問題だと思ふ。

居場所とは心の拠り所。その点、教会は最適な場所ではないだろうか。活動を続ける中で、市民同士の新たな出会いもできたようだ。

第24回、1月21日のテーマは「がんと共に生きる」。ゲストにがん哲学外来の樋野 興夫先生をお招きする。より多くの市民が集まることを期待する。

シリーズ 宣教への取り組み④

英国聖公会の宣教、最近の歩み

司祭 塚田 重太郎



今回から3回に渡って、宣教シリーズということで書かせていただくことになりました。あらかじめお断りしておきますが、このシリーズを通して、教会の未来について語るために、私はあえて、誰も語ろうとしない、現在の日本聖公会、あるいは東京教区のタブーに踏み込みます。

1959年5月11日、ナルニア国物語の著者、C・Sルイスは、ケンブリッジのウエストコット・ハウスという英国聖公会の神学校で、「現代神学と聖書批評学」と題した講演を行いました。彼はそ

の中で、英国聖公会の司祭たちが語っている「新しいキリスト教」は、それを聞いた人々をローマ・カトリックが無神論者にするだけだとの批判を展開しました。

この講演で語られた内容はまったく古くなっておらず、現代の私たちも耳を傾けるべきもので、時を改め

てその内容を紹介できればと思います。ルイスはこの講演を、次のような言葉で締め括っています。「自分が所属する教会の司祭たちに対して、宣教師の役割を果たさなければならぬというのは、非常に決まりの悪いことだ。しかし、そのような宣教の働きがなされなければ、英国聖公会の未来の歴史は、短いものとなるに違いない。」

ルイスは英国聖公会の指導者たちの中に「危機」を見、そして警告を発し、正確に、英国聖公会の未来を「予言」しました。彼は「新しいキリスト教」が、啓蒙主義の亡霊であり、単なる時代精神の反映に過ぎないことを知っていました。

「新しいキリスト教」は、フロイト、マルクス、ニーチェらが、単なる啓蒙主義思想家たちの願望の投影として暴露した「啓蒙主義的理性」の産物そのものです。とどのつま

り、啓蒙主義的理性の産物である「新しいキリスト教」は、「教会はすべての人がすでに『理性』によって知っていること以外、何も言いません」と主張します。

しかし、教会は「理性」によって知りうること以外何も言わないのであれば、そもそも、「新しいキリスト教」など不要です。皮肉なことに、「新しいキリスト教」の提案者とその信奉者は自ら、「教会は不要です」と宣伝して歩いたのです。英国聖公会の指導者の多くは、ルイスの警告に耳を傾けず、「新しいキリスト教」を宣伝し続け、それによって数え切れないほどの「空っぽの教会」を生み出しました。

英国のどの都市にも、「かつて教会だった建物」がいたるところにあります。私たちは家族が住んでいたスコットランドのアバディーンは小さな街ですが、中心街の「かつての教会」の半分以上が、もはや教会ではありません。英国聖公会は順調に衰退を続け、現在は消滅の一手手前

にいます。ちなみに、英国聖公会が消滅の一手手前にいるというのは、私が言っていることではありません。3代前のカンタベリー大主教、ジョージ・ケアリーが言っていることです。

しかし、この「消滅の一手手前」にある英国聖公会においてすら、「元氣な教会、メンバーが大きく増えている教会が、少なからずあります。同じことがスコットランド聖公会についても言えます。スコットランド聖公会全体は、高齢化が進み、新しいメンバーの獲得に失敗しており、急激に衰退しています。しかし衰退するスコットランド聖公会の中にも、元氣で成長している(メンバーが大きく増えている)教会があります。

これらの成長している教会には、明らかに共通のコア(核)があります。単純化の排りを恐れずに言えば、元氣で成長している教会は、ルイスの懸念を共有する教会であり、「古いキリスト教」を宣傳伝えていく教会であり、聖

書が教会の歩みにとって最高の権威であることを告白する教会なのです。

英国聖公会、スコットランド聖公会と同様に、日本聖公会東京教区も順調に衰退を続け、消滅の危機に瀕している。それは、元氣で、メンバーが大きく増えている教会です。

私の認識が正しければ、東京教区に成長している教会がないのは当たり前なことであって、何の不思議もありません。東京教区は(そして恐らく日本聖公会全体は)、主教が人事を支配するという制度によって、日本的画一性をすべての教会に押し付けました。こうして、英国聖公会でもスコットランド聖公会でも、「新しいキリスト教」に抵抗して、教会を生かし、教会を成長させた「古いキリスト教」を、東京教区から根こそぎにしたのです。

(聖マーガレット教会牧師)

第10回 韓・在日・日NCC女性委員会連帯交流会議に参加して

先月末の11月28日～30日、韓国のソウルで開催されたこの連帯交流会議をご存知の方は少ないと思うので、少し振り返ってみよう。

まず名称にあるNCCはWCC(世界キリスト教協議会)の各国組織で、日本は日本キリスト教協議会、National Christian Council in Japan (NCCJ)、韓国はNCCKと呼ばれている。

1996年6月和歌山県、白浜にて第1回日韓NCC女性委員会交流会議が開催され、その後お



むね2年毎に韓国と日本で交互に開催されている。当初の「日韓」は第3回から「在日・韓」の存在を明確にし「在日・韓」と、「交流」だけでなく「連帯」して行動することを確認しあい、「連帯交流会議」となった。テーマは「戦後51年目を歩み出して」から始まり、「東北アジアの平和と女性の役割」、「新しい歴史を創

造しよう」、「東アジアの平和と和解」など、今回は「和解の道のり、私たちはどこに？」であった。

今年のプログラムはエキュメニカル連帯と女性たちの平和の思いを込めた礼拝と聖餐／主題講演と現場報告―日本側：日本軍「慰安婦」問題についての現状と日韓「合意」以後の私たちの立場、在日側：地域からヘイトスピーチの根絶を／日本軍性奴隷制問題を解決するための1311回定期水曜への参加と発言／戦争と女性の人権博物館訪問／談話会／聖書研究／平和ワークショップなどが行われた。日本側

8名、在日側6名、韓国側22名の参加であった。日本側は全員信徒、韓国側は全員聖職者という構成は、発言の内容に国の違いとは異なる視点の違いも垣間見られた。

最後に声明文の作成に時間をさいたが、最終案まで至らず、原案を持ち帰って再検討することになった。

NCC女性委員会 前島 恵

SSN 世界の聖公会ニュース

世界の聖公会ニュース⑧

パキスタンにおいて異教徒間の関係構築に尽力（パキスタン）

ペシャワール教区において2年にわたり続けられてきた平和と調和推進プロジェクトの会合に出席したジャマティ・イスラミ（イスラム協会）のリーダー、シラジュ・ウル・ハク議員は「我々は信条に関わらず等しくパキスタン人である。非ムスリムが差別されるべきではない」と述べてプロジェクトの働きに謝意を述べた。プロジェクトはパキスタン各地で警察、政治指導者、宗教指導者等と連携して宗教間の対話と友好関係の構築を促進する活動を行ってきた。（10月26日）

エジプトテロ犠牲者のために追悼の鐘（エジプト）

シナイ半島のモスク襲撃テロの翌日、エジプト中の教会は犠牲者への追悼のための鐘を鳴らした。エジプト教区モウニア・アニス主教は「個人、コミュニティ、信仰は異なっ

ていても、破壊による痛みは同じです」と述べてムスリムコミュニティとの連帯を表明した。（11月27日）

東方諸教会と聖霊論について歴史的合意（アイルランド）

聖公会・東方諸教会国際委員会（AOIC）はダブリンの会合において「聖霊の発出と働き」と題する声明に署名し、2年に亘る作業を締めくくった。AOICは2015年ウェールズ会議においてフィリпокエの削除に合意した後、2016年レバノン会議において聖霊論及び経緯（オ

イコノミア）について議論してきた。聖公会は1976年のモスクワ合意においてフィリпокエは信条への正統な権威を欠く挿入であると見なし、今回、モスクワ合意に従いフィリпокエは信条に含まれるべきではないことに合意した。ダブリン大主教マイケル・ジャクソン神父は「AOICは2つの家族として共に働き、1つの家族になった」と述べた。（11月2日）

次回 大斎節号

2月11日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（三十四）

1. 安息日

妻「あなた知ってる、今日、説教で牧師さんが言ってたけど、安息日って奴隷の人も休めるんですって」
夫「そうなんだ、それなら願いがあるんだけど」
妻「なに？」
夫「ぼくを夫じゃなくて、奴隷にしてくれ！」

2. 結婚とは

牧師「結婚はすばらしいことです」
信徒「どこが一番すばらしいですか？」
牧師「それは、幸せは倍になり、苦しみは半分になるところです」
信徒「そうかなあ、ボクの場合は食事の用意や洗濯の量が倍になり、小遣いが半分になったけどなあ」

3. クリスマスなぞかけ

なぞかけ1：3人の博士とかけてまして、ミシュランのレストラン情報ときたま
そのころは、どちらも星のガイドが大切です
なぞかけ2：サンタクロースとかけてまして、子だくさんの親ときたま
そのころは、どちらも一生懸命働くのは、子どものためです
なぞかけ3：クリスマスとかけてまして、ウルトラマンときたま
そのころは、「シュワッ、来ませり」